

中国・東北の日本植民地教育実態調査

——「満洲国・関東州」における植民地教育に関する 第一次調査中間報告書——

磯田 一雄・野村 章

序

これは1991年度にサントリー文化財団の助成を受けた、共同研究「旧日本植民地・占領地の日本化教育研究」（代表：磯田一雄）の一部として1991年夏に実施された、中国・東北における調査研究報告の中間まとめである。同共同研究は他のメンバーが、このほかにミクロネシア（旧・南洋群島）の調査も行っており、中国も現在継続して調査・研究が進められているが、一つの区切りとしてこの年度の調査から得られた結果を、「満洲国・関東州」の分に限定してまとめておく。

筆者たちを含む「教科書研究会」は、成城学園に基盤をおき、過去5年余にわたって、旧日本植民地ならびに占領地における強制的な日本語・日本文化教育（通常「皇民化教育」といわれる）の実証的な調査研究を行ってきた。具体的には、当時発行された教科書や関連した文献の収集と、体験者（当時現地で日本側の教育を受けた人、またはそれを行った側の人）を招き、あるいは現地へ赴いて行った聞き取り調査である。これらの成果は各種の論文や学会報告のほか、植民地教科書、教育行政関係の文献の復刻も行っている。特に1989・90年度は、成城学園教育研究所の助成により、台湾・マレーシア・シンガポール及びインドネシアで初めて実態調査を行い、その成果の報告は『成城学園教育研究年報・第十四集』（1991年12月）に収録されている。1991年度にはさらにそれを発展させて、「満洲」（中国・東北）と「南洋群島」（ミクロネシア）へと調査範囲を拡大した。これは日本の旧植民地・占領地における「皇民化教育」の総合的な調査研究に一步踏みこんだものである。いずれにせよ、対象調査地域が多様かつ広大であるため、既調査地域の補充調査を含め、今後

も調査研究を継続して行う必要がある。

この種の調査の意義については、前掲の『研究年報』にやや詳しく論じておいたのでここでは省略する。地域により日本語・日本文化の受け止められ方が当然異なることが予測されるが、特に中国東北は同じ漢民族を主体とする植民地であった点で、台湾との対比が重要であると思われる。だが台湾に比しはるかに広大な地域であり、社会体制も対照的に異なるので、調査に困難を覚える点もあった（例えば交通事情の不備、未開放地区が多く存在する、など）が、そうした事情をも含めて対比してみたいと考える。

本調査は下記3名で行われ、他の研究会メンバーとともに共同討議を経た結果を、便宜上、ⅠとⅢを野村章、序とⅡを磯田一雄が担当し、全体を磯田がまとめた。したがって最終的な文責はすべて磯田にある。

調査者と報告の目録は以下のようである。

調査者：磯田一雄（成城大学文学部教授）

駒込 武（当時：日本学術振興会特別研究員，現在：お茶の水女子大学専任講師，1992年度成城大学文芸学部非常勤講師）

野村 章（育友会教育研究所顧問・教育史学会会員）

序	磯田一雄
Ⅰ 中国・東北の日本植民地教育現地調査の概要	野村 章
Ⅱ 長春・大連における聞き取り調査	磯田一雄
Ⅲ ハルビン・満洲里調査の概要	野村 章
Ⅳ 付録：調査資料	
①中国・東北現地調査活動日程	
②中国・東北現地調査 中国側主要関係者	
③関東州公学校卒業生の聞き取り記録	
④黒龍江省社会科学院における聞き取り（特徴的な発言）	
⑤内蒙古自治区満洲里市における聞き取り（特徴的な発言）	

本報告書では当初、駒込武が整理した収録文献資料の目録と解説をも掲載する予定であったが、紙数の制約もあり、目録は並行して行われた、磯田と駒込が研究分担者となっている文部省科学研究費助成研究「戦

前・戦中期の日本語教育史に関する調査研究」(代表：日本大学教授・佐藤秀夫)の報告書(1993年3月刊行)に大部分収録され、複写資料の一部は近く復刻される予定なので、他の機会にその後収録された資料と合わせて報告することとし、ここでは点数のみを示しておく。

1. 東北師範大学付属図書館：満洲民生部『国民学校日語国民読本・巻二』(1938年)ほか、国民学校、国民高等学校、女子国民高等学校、師道学校用教科書 15点
2. 大連市図書館：満鉄地方部、満鉄経済調査会、満鉄初等教育研究会刊行図書 6点
満洲国文教部刊行図書 2点
関東局在満教務部教科書編輯部『昭和十九年度要覧』 1点
3. 瀋陽市図書館：『奉天省教育輯覧』康徳2年(1935年) 1点
4. 遼寧省档案館：文教部学務司『康徳三年度地方教育状況調査報告書』ほか 7点

なおこの調査はサントリー文化財団の助成を受けて行われた。特に記して感謝の意を表したい。(磯田一雄)

I 中国・東北の日本植民地教育現地調査の概要

[IV 付録：調査資料①及び②参照]

教科書研究会1991年度の活動として予定されていた中国・東北の現地調査が、8月1日(出発)から約3週間にわたって行われた。調査に参加したのは磯田一雄・駒込武・野村章の3名である。これまで旧「満洲」(かつての「関東州」域と「満洲国」域を合わせた範囲をいう)にかんしてわれわれ研究会にも多少の活動実績はあった。しかしそれは主として国内に散在する資料の探索と野村の3回ほどの現地訪問によるものであり、現地については中国側の研究者、研究機関との交流、文献資料の所在確認についての基礎づくりにとどまっていたから、内容的には初めての本格的な現地調査といってよい。今回の調査では、日本による侵略下

の時期、旧「満洲」で展開された植民地教育（中国側では「奴化教育」という）について関連する文献資料を探し、必要なものについてはコピーしてこくこと、および現地の「奴化教育」体験者から可能な範囲で「聞取り」をすることを目的とした。

文献資料調査については、これまでの情報に加え、中国で1984年に発行された『東北地方文献聯合目録』（大連市図書館）によって、比較的に関係資料の収蔵量が多いとみられる大連市図書館・遼寧省図書館・瀋陽市図書館・東北師範大学図書館・長春市図書館を抽出した。また「聞取り」については、現地での事前手配が必要なことから、前記図書館調査への協力者を得ることを合わせて野村の旧知の趙連泰教授（ハルビン師範大学）と協議し、大連市・長春市・ハルビン市、さらに当方の希望として内蒙古自治区の満洲里市でのモンゴル族体験者からの聞取りを計画に加えた。交通機関、宿泊等については、以上の訪問先と協力者、全日程を中国国際文化交流中心に提起して手配を依頼したが、その際、北京では、これまでも訪中の都度ご援助いただいた中央教育科学研究所の金世柏学術委員とお会いできるよう希望を伝えておいた。

今回の往路にはチャイナ・エクスプレスラインの天津航路を利用したので、神戸港を出航したのが8月1日、天津新港に入港し車で約2時間、北京に到着したのは3日午後6時に近かった。翌日、国際文化交流中心主催の座談会がひらかれた。これは、金世柏氏がちょうど全中国の教育研究課題審査会議のため北京郊外のホテルに泊まり込んでいるときだったので、幾人かの専門家と一緒に会談することにしようとする提案されたからだった。金世柏氏と一緒に参加されたのは全国的にも高名な研究者の周玉良氏（中国地方教育史志研究会々長）他2名の方々に、筆者たちからはそれぞれ研究の立場、意図などを述べ、中国側からは賛意と評価、そして協力の強い気持が表明された。しかも話し合いが友好的であったばかりでなく、それ以後の東北での活動にとって有力な人脈の紹介もあり、意義は大きなものがあった。

以後、筆者たちは瀋陽、長春、大連の順にそれぞれ2泊しながら調査をすすめた。その詳細な内容、成果については更に十分時間をかけて整理・分析する必要があるが、ここではおおよその状況についてだけ報告しておきたい。

まず文献調査については、瀋陽市図書館・遼寧省図書館でそれぞれ若

干の資料を得たあと、北京で紹介された遼寧省教育委員会に陶増駢副主任を訪問し、資料の所在、整理状況などをきき、今後の研究交流、資料リストの交換について懇談することができた。さらに瀋陽では、関係者の格別の協力によって遼寧省档案（公文書）館の書庫を一覧することができた。近代的な空調設備の室で、移動式の大ロッカーに「満鉄地方部学務課」「偽満洲国文教部」のブロックがあり、それぞれ2000～3000点に整理された文書があるのを確認し、ため息を禁じ得なかった。まだリスト化はされていないようだが、この宝の山に分け入るには当然ながら日中の協力が必要である。それはどのようにして可能になるだろうか……。長春の東北師範大学図書館は、かねてから「奴化教育」関係の資料が多いと定評があり、カードも一応整理されていたので15点もの多くの教科書を発見した。大連市図書館もまたかつての満鉄図書館の蔵書を大量にひきついでいることで日本の研究者に知られているが、わが国では散逸して入手困難な重要資料がみられた。出発前からの予定どおり、ここで駒込は大連に引き続き数日滞在して文献調査にあたり、北京経由で先に帰国することとした。

「聞き取り」調査はまず長春の東北師範大学でおこなった。『東北淪陥十四年教育史料』の編者武強氏のアレンジで歴史系の王魁喜教授、教育系の趙家驥（ちょう・かき）副教授が貴重な証言を提供された。また大連では日本人女学校出身と中国人学校の女子高等公学校出身各1名の女性から聞き取りをした。そのあと磯田と野村は再び北上し、磯田は、これも予定どおり長春市で開催された吉林省社会科学学会联合会主催の国際学術討論会に5日間参加したのち北京経由で帰国した。野村はそのままさらに北行してハルビン市に到り、黒龍江省社会科学院で5名の研究者から体験を聞き、さらにハルビンを基地にして鉄道で18時間、内蒙古自治区にある中ソ国境の街、満洲里市まで足をのばし、これまであまり知られていないモンゴル族にたいする「満洲国」の教育を体験した人からの聞き取りに向かった。出発前に依頼の手紙をだしてあったが、現地では市の民族宗教事務局が全面的に協力してくれ、5人の参加者中3人がモンゴル系の人だった。そのなかの2人は漢族（一般中国人）の学校に就学しているが、ひとりにはモンゴル族のために設置された興安学院出身であり、貴重な証言だった。これらの聞き取りは数としては多くないし、戦後もエリートに属する人が大半であるが、客観的な事実を述べる能力が高

いので、私たちの研究にとって重要な証言が得られたといってよい。とくに、「満洲国」の名において強制された皇民化教育が強まるほど反発や抵抗が高まっていく有様がそれぞれに淡々と語られ、学校にたいする残虐な弾圧、組織的な反満抗日運動の学校への浸透など、日本側の研究の上でも念頭におかねばならない状況が語られている。これもまた、じっくり分析しなければならないものである。

今回の東北現地調査から帰って感ずることは、私たちは本格的な現地調査に一步踏み込んだものの、日中双方の協同、その協同のやりかたをふくめて、交流を深めることの一層の重要性である。中国側の成果や受け取り方を理解すると同時に、それを日本側の研究としてどのように扱い反映させるのか、日中それぞれの研究深化のために考えるべきことが多いといえよう。

(野村 章)

II 長春・大連における聞き取り調査

(1) 東北師範大学での聞き取りと討義

(王魁喜氏からの聞き取りの他はすべて通訳を介している)

8月8日、長春の東北師範大学を訪問した。午前中は図書館で、教科書を中心に資料調査と収録を行ったが、その時偶然ながら世話をしてくださった元東北師範大学教授・王魁喜氏(歴史系)から聞き取りができた。これは最初の聞き取りであったが、当時の植民地・満洲の学校の状況をよく伝えていると思われるので、その冒頭部分を次に紹介する。

王：私は1925年長春に生まれ、1935年長春の臨河三道小学校に入りました。

駒込：その学校には日本人の先生は。

王：いません。3年のときは東盛路小学校に入って、その時は日本の先生は一人だけ。マツダ先生。日本語を教えるだけ。——それは首席教員といいます。特殊な地位について、校長より強い、日本人だから。——(当時)日本語を習うとき多数の生徒は日本語を学ぶのを嫌った。日本の先生は(日本語を)習わなければ殴るよ。私は級長だからなにか用事があったら初め話します。その先生は中国語できません。ですから(日本語を)習わなければなりません。級長

だから日本語で。新京（長春）第二国民高等学校（商科）に入ったら、校長先生は中国人だけれど、副校長先生は日本人。それもこういう——（やはり権力を持っている）。そのときは先生は30名で、日本人（の先生）は三分の一。日本（人）の先生は日本語教えて、それ以外に体育、生物、とそれだけ。

駒込：この学校に入るのは試験は大変ですか。

王：大変ですよ！ 私が小学校を卒業するときは60名。その学校に入ったのは私一人だけ。受験は日本語は99点、100点満点の。間違った1点は襍という字。ソリですよ、雪の上を走る。それを（間違っ）てモリと覚えました。それで（1点引かれて）99点になった。それをよく覚えています。どうしてソリをモリと思ったかということ、この字が本のページの真ん中にあっただので、本が厚くて（開いても真ん中の部分は）よく見えませんから、（見間違えて）モリと覚えました。入学してから先生に、私の日本語は決して……ほかに入学試験は数学、日本語、いわゆる満語。ちょうどその時は新京の公立（の国民高等学校）は三つだけ。第一（国民高等学校）は工科、第二は商科、第三は農科。定員は第一が200名、第二、第三は100名で、計400名。

駒込：日本人は国民高等学校と一緒に……。

王：いやいや、別々で。日本人は日本の中学校に、満系は満系の学校に。そのほか男、女子も分けて。（男子が新京一中と二中）、錦ヶ丘——これは日本の女子。

駒込：これ（国民高等学校）は三つとも皆中国人が入ったのですか。

王：そうです。全部中国人。

駒込：国民高等学校の授業、国語というか日本語以外の授業も全部日本語ですか。

王：いや、中国の先生は中国語でやる。日本の先生は全部日本語で。

駒込：日本の先生は10人くらいいたんですか。

王：10人くらい。（定員の）三分の一と決めていますけど。その日本人の先生は級主任で、名前は田中先生——が日本語を教えてくれて。……あるとき私は机の上に立って壁に習字（の清書）を張り出していました。その時先生が教室に入って来たので、私はそのまま「キリツ！」。まわりは生徒の机がいっぱいですぐには降りられな

いから。ところが先生は怒りました。

駒込：そういうとき日本人の先生はすぐ殴る。

王：そうです。サンビンタ。(中国語では)三賓的給と書きます(「ピンタをくれる」の意。一種の「協和語(日本語的中国語)」。)。(以下略)

そういう教師・学校側の姿勢に中国人生徒が不満を持ち、教師の背中に後ろからそっと万年筆のインキをかける、ストーブに爆竹を入れて驚かす、などの復讐が行われたという。王氏はやがて建国大学に進学する。そこでも興味深いエピソードがあるが、それは後でまた引用することにしてしよう。

午後は東北師範大学を中心とした研究者を囲む懇談会があり、「奴化教育」をめぐる長春での最近の研究状況の紹介があったのち、東北師範大学教授趙家驥氏から自分の受けた植民地教育の体験が語られ、次いで活発な質疑が行われた。趙家驥氏は教育学の専攻でもあり、単なる個人史ではなく教育史をも踏まえての報告であった。このときの論議は我々調査者たちの「満洲」における日本植民地教育のイメージ形成に大きな影響を与えたと言える。

趙家驥氏の証言・報告

日本の植民地教育が中国で奴化教育(奴隸化教育)と呼ばれる大きな理由の一つに、中等教育の意図的な水準低下と実業教育化が挙げられる。趙家驥氏は、1928年瀋陽に生まれ、1936年小学校入学、1941年国民優級学校入学、1943年国民高等学校入学、というように、氏の受けた初等教育と、中等教育はすべて「奴化教育」だった。1937年の「新学制」によって、初等教育の制度は不変で6年間(ただし国民学校=4年制と、国民優級学校=2年制の2段階からなる)だったが、中等教育は従来6年制だったのが4年制に短縮された。高等教育は従来4年制だったのが3年制に変わった。したがって就学から大学卒業まで16年間だったのが13年間になった。この短縮によって東北の人民の教育レベルは著しく低くなったと思われる。その目的は国民の教育レベルを低下させて奴化教育を強化するためである。特に中等学校(国民高等学校と改称)はみな職業学校に変えられてしまった。従来の普通中学校が、農業・工業・水産業などの職業学校に変えられたのである。趙家驥氏の体験によると、これは軍

国主義の経済と関係があると思われる。植民地では農業、工業など、もっぱら下級の技術者、労務者を養成するための教育にされたためであり、体制に忠誠を誓う奴隷化教育を強めるためである、とする。

本来の初等・中等学校の任務としての、大学への進学準備教育は無視され、みな労働者を養成するためのものになった。看板が職業学校になっただけでなく、実際国民高等学校では、学生の労働時間（作業・勤労奉仕）が段々増えてきた。趙家驥氏は1942年国民高等学校（農業科）に入学したのだが、1学年の内本当の勉強時間は2カ月くらいで、春から秋まではほとんど農作業で、時には野菜売りなどもしたという。したがって中等教育とは名ばかりでレベルは極めて低いものだった。国民高等学校時代は全く何も習わなかったといってもいい。まさに日本の軍国主義が、中国を経済的に収奪するためにされた教育だといわざるを得ない。

教科目も段々少なくなって、例えば道徳・地理・歴史・自然は中等教育では極めて重要な科目であるのに、これらの科目を全部まとめて「国民科」という一つの科目にした。科目の知識は皆簡略なものにしてしまった。したがって本当の科学の知識を身に付けることは学習できなかった。今から見るとそのころ習った知識はとても浅く、狭くて系統的でない。結局中等教育のレベルはとても低くなった。教科書を見ても、当時の東北は華北などと比べるとあきらかに東北の方が水準が低い。

国民優級学校の満語読本の中にはこういうことが書いてある。「満洲国の建国の理想は日本の建国の理想と全く一致している。日本は満洲国の建設にとっても援助していただいた。我が国は日本の協力を得なければ今の国にはならない。だからこれからも日本の援助をいただいてこそ自分の国を発展させる見込みがある」と。教科書から見るとその時の日本は中国侵略を、侵略ではなく援助だと強弁している。教科書を通じてこういう思想が貫いている。新学制を実施してから日本語も「満語」（＝中国語）とならんで国語とされた。日本語は外国語ではなく、自分の国語として勉強しなければならなくなったのである。最初は日本語の授業は毎週4時間くらいだったが、段々増えてきて最後は毎週10時間になった。私は日本語がうまくできなかったので、しょっちゅう打たれた。満洲国の国民は、全部日本語ができるように、そして自分の国語を忘れてしまうようにするためだった。

満洲国皇帝の日本の天皇訪問を主題とした当時の教材によれば、日本

の国を作った天皇の神（アマテラス）が満洲をも作った。昭和天皇は「アマテラス」の子孫であり、溥儀（満洲帝国皇帝）もその子孫だという。だから日満は一体であり、日本と満洲国は父と子の関係で、満洲国の国民は日本の国民の一部だというのである。このように教科書を通じて東北の子供たちに日本の軍国主義思想を蔓延させ、自民族を劣等民族と感じさせようとしていたのである。やがて青年たちが満洲国のために、すなわち日本のための犠牲になることを辞さないような心情を形成させるのが狙いであった。

溥儀は1940年に二回目の訪日の後、建国神廟を作らせたが、各学校にも構内に神廟を作るように強要した。学生たちは神廟の前を通る度に拝礼しなければ罰せられた。警察に捕まえられた人もいた。毎朝宮城と皇宮遥拝があり、寮に泊まっている学生たちは朝食のときに謝恩歌を歌わされた。その歌詞の中には、私たちの食べるものはみな天皇の神様からもらったものだであった。寝る前にも、今日一日天皇陛下に対して何か不遜なことをしなかったか、「反省」をさせられ、何かあれば「反省録」を書かなければならなかった。太平洋戦争開戦後の1943年には、再び学制が改訂されて皇民化のための思想教育は一層強められた。

討議

大要以上のような趙家驥氏の報告に対して、王魁喜氏は、自分も「奴化教育」の被害者だといい、奴化教育は労働など実業も重要な教育のメディアだが、それだけではなくやはり「国民訓の暗誦」の強制に見られるように、思想教育が主要な中核だったとみるべきだという。満洲国が存立を日本に負っているとして、日本に感謝することを強制したのみならず、歴史教育においても東北地方の歴史を中国民族の歴史と分けて叙述し、東北地方の青年に自分の民族の歴史を忘れさせて満洲国の歴史を覚えさせようとした。すなわち青年たちにただ「日本＝満洲国」だけを覚えさせ、中国を忘れてしまうように仕向けようとした。だがたとえ若い世代は歴史を知らなくとも、父母や祖父母たちは皆その事実を知っている。従って奴化教育はするほど皆反抗心を持つに至る。例えば学校では毎朝校庭に学生を集めて東京に向かって「宮城遥拝、新京（長春）に向かって「帝宮遥拝」をやらせていたが、遥拝（中国語で、ヤオバイ）とはいっても形だけで、心の中で生徒はこれを「要敗（ヤオバイ＝日本は

必ず敗れる)」と聞いた、あるいは戦争のために死んだ日本人は偉人だから「黙祷」(モータオ)、と号令がかかると「磨刀」(モータオ=日本を倒すために刀を磨いておけ)と聞くというように、面腹を生き出していたのである。王魁喜氏の語る敗戦直前の建国大学の次のようなエピソードは、「奴化教育」の「効果」のほどを雄弁に語っている。

王：1945年の8月12日、その時は教務長が全部生徒を集めて、彼は学生に「皆さんはここで、五族協和と言う意味をよく知っていますから、今なら(こそ)非常の時期で巷戦(市街戦のこと)をなささい。日本人と一緒に巷戦参加するもの(といて募ったら)、……その時はね、中国人も、朝鮮人も、一人も立たない。その時教務長は、「ああ、失敗！」私たちは(参加の意志を示して立たないのは)恐ろしいけれど、日本人と一緒に戦う人は一人もない！

そこで教務長は、「ああ、失敗した！」と。

奴化教育は日本の侵略地域が広がるにつれて、だんだん広まっていった。その内容もはじめは「王道楽土」など、儒教思想など中国文化を利用して教育していた(例えば、大連での女性からの聞き取りの中に「三従四徳」を教えられた話が出てくる)。しかしそれは徐々に日本の色彩を強めていき、最後の段階では完全に日本文化そのものになっていった。中国のものはあくまで間に合わせに利用されたにすぎなかったのである。植民地教育と儒教との関係は、立ちいって検討される必要があるだろう。

ところで、このような論議の中から、いくつかの検討課題が生まれてきた。一つは都市も農村地帯でも同じように奴化教育が行われていたのか、ということである。「実業=労働教育」が家庭や地域社会の背景に関係なく、同じように受け止められていたのか、という疑問がある。さらに通常「満洲」のなかに含めてしまっているが、「満洲国」と「関東州」とでどのような違いがあったのかも検討しなければならないであろう。

次に実務教育が中心になって、知的教育の水準が下がったということであったが、作業教育・体験教育は当時日本内地においても、満洲の日本人教育においても、「新教育」の中核であった。それは結局は「安上がりな労働力提供」に過ぎなかったのか、それともそれを越える積極的

な要素を内包していたのであろうか。特に玉川学園＝小原国芳は、満洲国との関係が深かったようである。「新教育」における理論とその植民地における適用との関わりは重要な課題であろう。

最後に私塾の比重とその果たした役割の追求も重要な課題である。9・18事件以前の「満洲」には、一万以上の私塾があったという。特に地方で盛んであった。一般に塾の教育レベルは高いとは言えず、満洲国時代の塾には日本語を教えたものや、中には積極的に民族平等を説いたものもあったが、概して「三従四徳」のような伝統的儒教道徳が教育内容の中心であった。「新学制」実施以後は、私塾の多くは国民学舎や国民義塾に改編されたりして体制に組み込まれ、純粹の私塾は少なくなった。共産党など「先進的な」思想が塾を通して蔓延するのを防止すると同時に、傀儡政府としては、塾をも国民教化の手段にすることを狙ったのである。朝鮮の場合は、「書堂」のなかに反日教育の拠点になっていたものがあるが、「満洲」の塾の中にも反満抗日の拠点になっていたものがかなりあったという。しかし朝鮮で、使用されていた「童蒙先習」のような民族主義・教材などがあったかどうかは明らかでない。

私立学校(塾)における「反満抗日」の教育の実態は、きわめて重要であるが資料に乏しい。「延辺地区」の朝鮮族の私立学校の事例は比較的知られているが、もともと辺地で行われることが多いし、資料を残すのは当事者にとって危険でもあったからである。当事者の体験の聞き取り調査が重要になる所以である。一方、摘発されて拷問を受けたような場合には、その記録が残されている可能性がある。——この点については、後で野村がハルビンで質問してみたが、黒龍江省ではそういう記録は聞いたことがない、あるとすればやはり档案馆(公文書館)だろう、ということであった。——いずれにせよ、通常の文書資料に頼る限り一番出てくるのは日本側の作った学校制度であるが、そこにとどまらず、塾の教育とか、親から受けた歴史の話といったことまで含めて、全体をまとめて研究していく必要性を強く感じさせられたのである。

(2) 大連での聞き取りについて [IV 付録：調査資料③参照]

大連では関東州の公学校に在学した、沙玉琴・韓一斌という二人の女性の体験を聞き取りすることができた。一般に女性からの聞き取りはなかなかその機会が得られないので、貴重な例といえよう。

二人の日本語の能力については、記録によりおよそ想像がつくと思われるが、沙さんはてこずった時以外はほとんど通訳を通さず、日本語で聞取りができたが、韓さんは比較的簡単なこと以外はすべて通訳を通して聞いている。

全体として中等教育レベルでは現地民学校でも日本語だが、さすがに初等教育レベルでは全く日本語だけということはない。実際4年制の公学校では、日本人の教師がいることはほとんどなかったようである。公学校では中国人の教師が片言の日本語を教えているというのが一般的な状況で、それこそ「直接法」の実施どころではなかったであろう。また大部分の生徒は4年までで学校を止めているのが実情であろう。優秀な生徒は高等公学校に行くが、そこで初めて日本人の教師が徹底した日本語の訓練をするということのようである。公学校の生徒が5年生（高等科）に入ったときに、日本語が不揃いなので、それを訓練するための教科書を山口喜一郎が作っていることがそれを示しているように思われる。

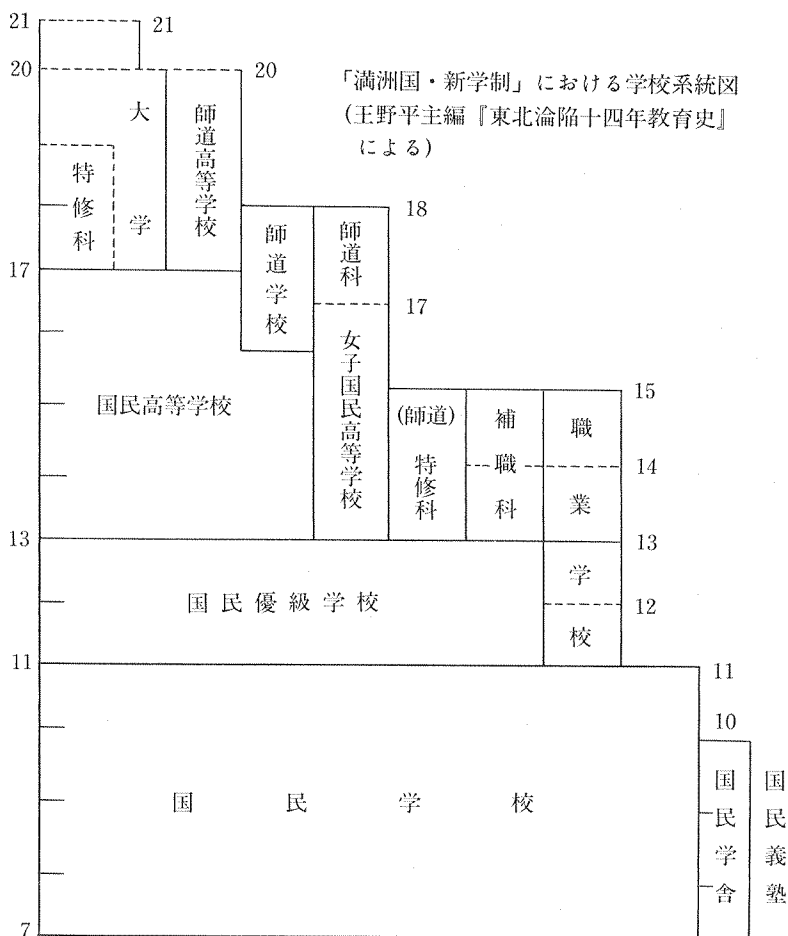
日本語強制の手段について、中国語を使ったときには、やはり予想通り叱責や罰（正座）が出てくるが、この種の罰則に植民地では非常に多い「便所掃除」が、このときの聞取りではたまたま出てこなかった。その理由は分からない。90年春の台湾の調査では「掃除」をやらされたというのがあった。旧南洋群島での調査ではやはり「便所掃除」が多いという。日本の学校では、戦前から罰則に掃除があるものだから、戦後の日本人が掃除をする人を卑しめる意識が出てきたのではなからうか。日米比較調査を見ると、日本の今の子供は掃除は下の人がやるもの、罰当番と言うような意識があるという。

（これに関連して、やはり関東州の公学校を出た女性が、この聞取りの時に会えなかったので、後で野村宛に書いた手紙によれば、公学校の上级生のときに既に勤勞奉仕があり、注射器のアンブルを作る作業に初めて動員された。そのときある女の子が日本人の先生が側にいないと思って一言中国語を喋ったら、たまたま後ろにいた日本人教師に、その場で殴り倒されて連れ去られた、という。その時自分は「あの子が何の悪いことをしたんだ、自分の国の言葉を喋っただけじゃないか」と思ったことがあったけれど、口に出して言うのは怖いから黙っていた、という話を書いてあった）。

日本人高等女学校のクラス55人くらいのところに、中国人が10人くらいずつ入る、という配分は当時標準的だったのではないか。ただ沙さん

によれば、中国語を大連の（日本人）女学校では開設していなかったという。しかし先生に対する印象は割にいいようである。なかには殴った先生もいたというが。韓さんもほとんどの日本人の教師にはよい印象をもっている。それにしても、「一番楽しかったのは解放（日本の敗戦）の時」だったという証言は、やはりわれわれ日本人に衝撃を与える。

韓さんによれば、現地民のための学校の数が少なかった、女子用はもっと少ない。高等公学校（金州）は寄宿舎に入らねばならなかったという点が印象的である。ただし中国語の時間はあった。中国人だけの学校



だから中国語はあって当然だが、週に4時間はやはり少ないと言えるであろう。

中国人が米を食べることは許されなかった、というような甚だしい差別があっただけに、中国での聞き取りには「食べ物の恨み」がよく出てくる。「椽子」を食べさせられた例はハルビンの唐氏の証言にもある。一つには調理法にも問題があったのだろうが、一番大きな問題は、やはり「日本人はそんなもの食べてない」、ということであろう。ひどいところでは寄宿舎のなかで、日本人や朝鮮人が米を食べているその横で、中国人が柝の実を食べていたと言うような例があったという。

大連だけでなく、ほかの聞き取りでもそうだったが、全体的に台湾の場合と比較して、現在の日本語の能力の程度が全く違うということが本当によく分かった。この事例など比較的日本語で聞き取りができた方だが、台湾の場合なら、例えば高等女学校を出た人だったら、ほとんど日本人と変わらない程度に話すだろう。関東州や満鉄付属地の日本語教育の期間は必ずしも短いとはいえないが、台湾と違って一応複言語制であったこと、さらにどの程度に身の回りに日本人がいたかということと、解放後日本語を積極的に使用する機会があったかどうかが大きく関係しているように思われる。またこれには民族による違いも考えられる。同じ地区でも例えば朝鮮族の場合は、日本語の習得程度が高かったと考えられるからである。しかしこれらの点は今後の調査で実証していくほかない。

(磯田 一雄)

III ハルビン・満洲里調査の概要

[IV 付録：調査資料④及び⑤参照]

最初にお断りしておかなければならないのは、この両地域の聞き取り調査では、長春や大連と異なり、すぐれた通訳が得られなかったということである。元の発言はかなり長いのに、通訳は要約的に（報告資料にある程度に）ほんの一言にしか訳してくれないのである。いずれ元の録音テープを在日中国人に聞いてもらって、もっと詳細に訳してもらえたら、かなり細部にわたっての貴重な情報が得られるのではないか、と思われる。

先ずハルビンの社会科学院での聞き取りであるが、関係者が6人集まり、

座談会式に聞取りが行われた。6人のうち歩平氏は若い人で植民地教育の体験がなく、証言者は5人である。南満はどちらかといえば状況順応的であったの対し、ハルビンなど北満は抗日連軍の拠点で、抵抗運動が強かった地域であった、といわれている。実際北満関係の人々からの聞取りは、ハルビンの近くでも日本側が管理している満洲国の学校にいると、時々抗日連軍の人が来たりするが、そのことを学校には絶対にいかなかったとか、八路軍の情報が入ったり、あるいは上級生がいろいろソ連について下級生に語ったとか、という類いのことが多かったというが、今回の資料の上にもそれが反映している。

長春の趙家驥氏の話にもあったように、中等教育機関である国民高等学校をすべて実業学校としたこと自体が「愚民政策」という批判を受けているのであるが、とりわけ農業科では、(また農業科がもっとも多かったのだが)、ほとんど知的な学習ができていない、という状況は劉民声氏の場合も同様である。これに対して工業科の場合は多少事情が違うようである(唐文斌氏)。満洲にも朝鮮や台湾と同じように、中等学校には教練があった。教練という科目があったとみんな一様に証言している。勉強するつもりで学校に入ったのに、入学後は勤労奉仕と軍事訓練ばかりで馬鹿みたいなことになった、と話してくれた人もいた。食べ物の差別や思想犯の取締りの体験も生々しいが、中国人や朝鮮人の教師が「日本人の教師以上に生徒をいじめた」という証言は、他でも時々聞くことがある。植民地教育の恐ろしさの一つであろう。

今回の調査で一番興味深かったのはモンゴル族のそれである。満洲里ではモンゴル族の植民地教育を受けた人々の聞取りをしたのだが、ここでその斡旋をしてくれた烏云氏と、史淑蘭氏は民族宗教事務局の事務局長と副局長であった。満洲里周辺には25～26の少数民族がおり、その宗教を保護するのが仕事だという。中国の少数民族対策は日本とは対照的である。日本は白系ロシア人などは保護したが、オロチョン族などの少数民族の文化は全く破壊してしまった。その点では清朝時代のほうがまだよかったという。

満洲国当時の人口は、「五族」のなかでは第1位漢民族が3600万余のときに、朝鮮族が110万で第2位、僅差で第3位(103万)だったのがモンゴル族であった。現在の中国の内モン自治区は広大だが、そのうちの東北の5分の2くらいが満洲国に属していた。今の内モン自治区内に国

境があったのだが、草原だから国境線もはっきりせず、しょっちゅう紛争が起きたのである。内蒙古自治区政府の政策と、この満洲国管下のモンゴル族の政策の比較研究がゆくゆくは必要になるであろう。

大連の女性の発言にも感じたのが、今回の調査で以前訪問した時と違う、という感じがしたのは、その当時はこうだったけれども、「その後中国共産党の指導により勉強して、はじめて侵略の本当の意味が分かりました」というように、「中国共産党の指導により……」という言葉がよく出たことである。満洲里での聞き取りの中に「侵略というものは必ず失敗するものだということが分かった」という意味の発言が二人から出てくるのもそれであろう。また満洲里で民族宗教事務局長の人に「こんなに多くの民族がいて、民族のごたごたのようなものがあるんですか」と聞いたら「全くありません。中国共産党の指導により少数民族はうまく行っております」という返事があった。以前は、われわれの会うような人から「共産党の指導により……」などという語句は一度も聞いたことがないので、「これはやはり天安門事件以後の変化だな」と思ったものである。

次に確かめられたのは、「五族協和」を唱えた満洲国における民族差別の序列である。ハルビンでの孟氏の発言にも「日・朝・中(漢)」という序列が出てくるが、モンゴル族によれば、日本の支配下では漢民族が一番下で、「日・朝・蒙・漢」という序列になるのである。(なおロシア人は正式には「五族」の中に位置づけられていない)。満洲里の高氏が「蒙古族は50年先には朝鮮族に続いて日本籍だが、漢民族は150年くらいかかるだろう」といわれたという意味の証言をしているのがこれである。学校に入るときもモンゴル族が無料なのに対し、漢民族は有料であった。日朝同祖論とならんで日蒙同祖論というものもあったが、これは日本語と同じウラル・アルタイ語族に属するというような言語構造の類似性などを根拠としている。しかし日本の差別は自分たちから見た相対的な距離(相違の大きさ)に基づいているのだから、距離が縮まることはあっても決してなくなることはないのである。

だが実際の言語教育の問題になると多少状況は違ってくる。小学校の低学年はモンゴル文字の教科書を使用したようであるが、モンゴル語の授業は週一回、しかも午後におかれている。1・2時間目は日本語の授業、3・4時間目くらいが満語(中国語)、モンゴル語はそのあとという

わけで地位が低い。これは満語（中国語）が公用語になっている以上当然のことであったかもしれない。ともかくモンゴル族の子どもたちは当時一応日・中・蒙3カ国語を学習したこととなる。

それではモンゴル族の子どもは、満洲国の学校に入ると満語・日本語の二つの外国語を習うことになるのかといたら、そうではなく、日本語と蒙古語を学んだという。満洲国政府の公文書のなかでも、複国語制については（れっきとした法律ではないが）、日本語は国語とする、蒙古、ロシアについてはそれぞれの言語を公用語に準じて、当面使用してよい、と規定されていた。モンゴル族の小さい子は満語（中国語）は学校で分からなくても構わない、ということだったのである。従って中国語の時間はなかったようである。嶋田道弥『満洲教育史』でも、モンゴル族の場合はモンゴル語の教科書でいいことになっている（少なくとも公式的な文書ではそうである）。

幸いなことに、今回満洲里で聞き取りした3人のうち一人（丹氏）は、当時2校くらいしかない、モンゴル族のための中等学校であった興安学院の出身者だった。あとの二人は初等教育はモンゴル族の学校で、中等学校からは漢民族の学校に通っている。しかし生活のなかでは漢民族と混住していたのだから、中国語も学校で習わなくても、ある程度自然に習得していたのではなからうか。生活の上では、モンゴル語と中国語の併用であったろう。したがって初等学校で中国語を学習していなくても、中国人のための中等学校に入れたのであろうと思われる。

モンゴル族は言葉の構造こそ日本語とよく似ているが、漢族や朝鮮族と違い、全く日本人の予想を超えた生活と文化をもっている。嶋田道弥『満洲国教育史』では、「蒙古族」の教育を、全くの遊牧生活で文字も知らない野蛮人に文化を与え、開発するのだという立場で叙述している。だがそれはやはり一度モンゴル族の側に立って見直してみないと大きな誤りを犯す恐れがあるのではなからうか。中国語・中国文化との関わりや、固有の社会構造・宗教などを始め、モンゴル族の実態の研究は日本でもまだ空白に近いのではなからうか。教育史の分野に限らず、日本帝国主義のモンゴル族支配を研究している人が果たしてこれまでどれだけのだろうか。その意味で今回初めてその実態の一端を、植民地教育の側面からかいま見ることができたのは、まことに幸いであった。

（野村 章）

②中国・東北現地調査 中国側主要関係者

都市	氏名	役職
北京	鉄鷹	中国国際文化交流中心対外聯絡部副主任（通訳）
	金世柏	中央教育科学研究所学術委員（中国比較教育研究会顧問）
	周玉良	中国地方教育史志研究会々長（中央教育科学研究所研究員）
	呉福生	全国人民代表大会教育科学文化衛生委員会教育研究室主任
	蘇渭昌	北京師範大学出版社教育心理編輯室主任
瀋陽	馬越山	遼寧社会科学院歴史研究所（東北淪陥十四年史研究室主任・満鉄史研究中心秘書長）
	馬興国	遼寧大学日本研究所副所長（「日本研究」雑誌社編輯長）
	陶増駢	遼寧省教育委員会副主任（遼寧国際教育交流協会副会長・遼寧省高等教育学会副会長）
	趙云鵬	遼寧省档案館副館長（遼寧省档案学会副理事長）
	郭君	遼寧省図書館副研究員（瀋陽市地方志学会常務理事）
旅行社員	通訳	
長春	鞠玉華	東北師範大学外事処（通訳）
	王魁喜	東北師範大学歴史系教授
	武強	『東北淪陥十四年教育史史料』主編
	趙剛	「現代中小学校教育」編輯
	趙家驥	東北師範大学教育系教研室主任（全国教育史学研究会理事）
大連	董振興	大連市委党校副教授
	徐琳	〃 理論研究室
	旅行社員	通訳
ハルビン	歩平	黒龍江省社会科学院歴史所長
	趙連泰	ハルビン師範大学歴史系教授
	謝嵐	黒龍江省教育委員会史志弁公室主任（中国地方教育史研究会常務理事）
	孫徳新	黒龍江省国際文化交流中心
	張穎	〃 （通訳）
満洲里	烏云	中国内蒙古満洲里市民族宗教事務局々長
	史淑蘭	〃 〃 副局長
	韓徳文	医師（通訳）

（作成・野村章）

③ 関東州公学校卒業生の聞き取り記録

沙玉琴＝解放時：大連高等女学校在学，生家は商店（肉屋），かなり日本語が話せる

韓一斌＝解放時：金州女子高等公学校在学，生家は農家，あまり日本語が話せない

◎＝通訳。二人とも初等教育は公学校で受けた。1991年8月10日聞き取り。

沙：私はね，小学校のときね，大連土佐町公学校。……その時ね，大連高等女子学校（ママ）に入った。1945年8月のとき戦争が終わってから，学校なくなりました。大連高等女子学校（ママ）は日本の創立した学校です。先生たちや学生たちは全部日本人です。中国人は1学年一人ぐらいあった。あのとき教育ね，日本の教育，あのときあの学校に入ったらね小学校（公学校）のとき試験がね，試験がしてね，日本語が上手な人が……。授業の内容はね，国語……国語は日本の，歴史，地理，地理は，歴史の日本の歴史です。あのその外ね，数学，物理と生物，家事，修身，習字，その外に音楽や手工ね，画カ？……あの時の生徒はヒクイ（？）ですよ。中国人は学校で中国語を話してはいけません。

駒込：中国語を話すと怒られますか。

沙：ええ。ええ，始めからね，下手ですね。時間が長いのでだんだん……。中国人は学校にいてからね，中国語が話しができません。小（公）学校は（全部）中国人。……先生はね，あの，日本人も中国人も。大連高等女子学校（ママ）は日本人の学校。

野村：日本人が中国語を勉強する時間は。

沙：ないです。

駒込：土佐町公学校では全部日本語だけで授業をしたのですか。

沙：いいえ。

駒込：中国語を使って。

沙：ええ。そうです。

◎：小（公）学校のとき，日本人の先生は日本語をしゃべります。中国語はしゃべりません。

沙：小学校のときね，4年生以上ね，日本語だった（◎日本人だった）です。……1年生は中国人。

◎：まず会話(?)……それから日本語の50音などから。

駒込：周りの友達が公学校のときに皆日本語をしゃべれましたか。

◎：毎日日本の先生と接触して、話す機会が少ない? 小(公)学校の5年生から全部日本語でやっていますね。生徒も日本語でしゃべっています。

駒込：それは日本語の科目だけじゃなくて歴史や数学でも日本語で授業する……。

◎：そうです。

沙：小学校の4年のときから日本人の先生

韓：私たちの学校は中国人の生徒です。先生は、中国語の、中国語の満洲国語(満語=中国語)の先生が中国(人)、その外は全部日本人の先生。日本語、歴史、地理、物理、化学、数学、家事、音楽、体育。

駒込：韓さんの先ほどの金州ですね、公学校の名前は……。

韓：公学校は旅順公学校。

野村：旅順公学校は小学校と同じですね。小学校程度でしょ。

韓：ええ小学校。私は旅順に、私のうちは旅順にあった。(以下中国語)

◎：韓さんの家は農民ですから、旅順に引っ越して。なぜなら日本統治時代は学校が少ないんです。女子学校はもっと少ないんです。だから韓さんはね、小学校へ行くときは往復は8キロだったです。中学校のときですね、20キロ往復は。

駒込：そんなに遠くても韓さんのお父さんは学校にいったほうがいい、とって、学校に行かなくてもいいとはいわなかった(わけですか)。

韓：中学校のときは(以下中国語)。

◎：韓さんのお父さんは開明の人士です。韓さんの住んでいた村は韓さんだけ女子学校にいったのです。とにかくその時ですね、女子学校はものすごく少ないんです。遠いところに一つの学校があるんです。韓さんの学校ですね、金州女子(高等)公学校は、関東州ですね。これだけが中等学校……

韓：日本官立……(これだけはっきりいう)

◎：日本官立の中国人の女子学校は一つだけ。だから旅順から金州に(韓「寄宿舎」という)寄宿舎に住んだんです。

駒込：沙さんは日本人の学校に入っていて、日本人の学校に少し中国人が入っていて、韓さんの学校は中国人だけの学校を関東州で建てた。

沙：あの時にね、大連市はね、日本の女子学校は五つあったんです。神明、弥生、羽衣、……、この先生の学校はね、金州女子学校、または大連市に……学校があって全員進学しました(?)

◎：その時にですね、日本人の人数は少ないんですけど日本人のための学校、小学校、中学校、高等学校、たくさんいます。中国人は人数が多いけれど学校がものすごく少ない……。

駒込：差別ですね。

◎：そうと思います。

磯田：その中国人の女学校に日本人は一人もいませんでしたか。

韓：ええ。

駒込：先生は日本人が多いですか。

韓：満洲国語(中国語)の先生のほかは皆日本の先生。

駒込：校長先生の名は。

韓：水之谷。

磯田：中国語の時間は1週間に何時間くらいありましたか。

韓：1週間に4時間くらいです。

駒込：少ないですね。お二人とも女学校に入るのに試験は大変でしたか。

◎：試験はとてもきびしいです。600人位受験して100人位入学できます。

駒込：沙さんのばあい何人くらい中国人の人が受けたんでしょう。

沙：50人くらい受けて中国人が10人くらい?……大連市の小学校に何百人いるか分かりません。私のクラスはね小学校のときね、12人がね入ったんです。女学校に。

——しばらく◎を含めて3人で議論。ここで突如話題が変わる——

◎：(「橡子面」と書いてみせて)これは漢字を見てわかりますか。これは一つの木です。木はこれくらいの実があるんですね。これを煮て食べるわけなんです。とても食べにくいものです。その時は中国人はほとんどそういうものを食べた。この木の葉はとても大きくなる。小さなちいちゃな実がありそれを食べます。(柞⇒(実)。橡子面はとちのみ?)それをみんな食べて生活していたんです。その時ですね、糧食はないんです。ほとんどないんです。日本人はこれを分配して食べさせたんですよ。日本人は食べてないんです。中国人だけ。これは私のお父さんもよくいってました。ほんとです。

◎：この字を見てわかりますか。この木の実。私はよくわかりますよ。

◎：その時ですね、中国人はこれを食べたんですよ。そのものですね、人の食べるものじゃないんです。……のほうが、あるいはいろいろな動物の食べ物ですよ。けど日本人は中国人にこれを食べさせたんですよ。

◎：その時ですね、日本人と中国人は平等 [にしてはいい?] ……日本人は米とかおいしいものを食べられますけれど、中国人はね、糧食がほとんどなくてこういうものを食べてますよ……。

◎：戦争の始まってから……。

韓：あれは、44年。

沙：あの時ね、私はね、アカシアの花(?)を煎じてお茶にした。野原の草ね、一生懸命……。

◎：その時ですね、中国には糧食が少ないので、アカシアの花のなかです、玉蜀黍の粉とあわせて、カベの中にぬいで? 食べるわけです。そういうようなものを食べたので体の調子が悪くなったのだと思います。

駒込：43年、44年は学校の授業もあまりしないで畑で勤労奉仕ですか、働かされたことが多かったですか。

沙：私の学校はね、1年生のときにね、2年生のときの授業が……。1943年、44年、45年だんだん授業が少なくなりました。毎日勤労奉仕に行きました。

磯田：勤労奉仕はどんなことをしましたか?

◎：その時ですね、東北地区の学校は勤労奉仕は全部やっています。それからですね、戦争のためいろいろの戦キョウ? の負傷した人を繃帯ですね。戦場(?)看護婦の仕事を勉強しています。勤労奉仕をやっているので生徒たちの気持ちがよくない。だから日本人の先生が行った場合、しっかりやって(先生がいなくなると)のんびりして……日本人と対等(に)することがその時中国人には無理なんです。けど仕方がないので消極的に対抗しています。中学校の時、愛国は実はどういうことかよくわかってない。けどね魯迅の小説を中国人の先生たちは生徒によく読ませた。高等(女)学校になってからいろいろ積極的にやはり日本のよくないということね、どのように抵抗したほうがいいのかを考えさせた。駒込：そういう考え方は魯迅の小説を読んだわけですね。沙さんも魯迅を読みましたか。

沙：解放後。あのときは……(日本人の高等女学校にはそういう機会はなかった)。

◎：その時中国人はよくいじめられるとはいえないんですが、あるときにはいじめられた。

野村：日本人学校ね。

◎：日本の学校の規律がきびしいので……。中国の生徒と日本の生徒と喧嘩することがとても多いのです。

野村：女生徒でも？ 沙さんは日本人と一緒に勉強したということですが、日本人の女の人からいじめられたとしたらどんなことがあったのか。

沙：中国語は使ったらいけません。使ったら先生に言うよ。

駒込：ああ、なるほどね。

沙：だから中国語は学校では使いません。

磯田：もし中国語を使ったら……。先生は怒りますか。

沙：怒ります。

磯田：どういう罰が(ありますか)……。

沙：規則があるのに、どうして中国語を使うんです。立て。座りなさい(正座)、小学校まではね。中学校ではね、先生は「中国語は使ってはいけません！」そういったんです。

◎：中国人は中国語を使うことはできないと、……。44年の時ですね、つまり椽子面を食べたときですね、あの、半分くらいの学生は家に帰りました。その時は日本の先生ですね、一つの部屋一つの部屋に〔部屋ごとに？〕捜しに行ったんです。学校に出てくれ、と勧めた。なぜなら、その時は中国の学生は自発的に、瞬間的に学校をやめた。

野村：その生徒さんたち、一番怒ったのは何ですか。食べ物？

◎：食べ物。……半分くらいの生徒ですね、学校をやめたから、日本人は一人一人勧めて学校に行くようにさせた。その時が学校の食べ物ですね。少しぐらいよくなれば。

一同：ストライキ。

磯田：そうしたら生徒が少し戻ってきましたか。

◎：すなわち百姓は食べ物第一。……その時ですね、全部学生服を着ていますね。日本人も中国人も同じですよ。今考えてみるとそういうほうがいいと思っていますね。つまり学校の服を着たほうがいいと、生徒がね。

◎：さっきの質問ですね。日本人と中国人と同じクラスと一緒に勉強した時ですね、日本の先生は中国人に対して日本人に対して態度は同じで

すか。さっき韓さん（の答えによれば）ですね、うちのクラスは全部中国人ですからそういうことを考えたことがない。けれど日本の先生は人によって違ってますよ。ある人は親切で、ある人は親切でないです。ある人は教育が第一、ある人は日本の軍国主義を全部中国人に……。

◎：日本の先生ですね、授業のとき、瞬間的（習慣的？）に日本の規律、つまり軍国主義を中国人に教えてますと聞いてますね。韓さんの答えですね。ほとんどの日本の先生はいいです。韓さんはほとんどの日本の先生にいい感じをもっていました。今でも夜夢を見ると。悪いのもいますよ。

◎：日本の先生は中国の生徒を殴るか、と言うことなんですけど、ほとんどしてないんですけど、ただ日本のクロダ？　と言う先生は体育をしたとき中国の女生徒を殴った。

韓：女の先生です。

沙：先生はね、一人の先生はひどいですね。学生を捕まえてね、廊下でね、蹴る？　今思えばねあのときの教育はね、軍国主義の教育でね、毎朝ね、日本の国旗をあげ、日本の国歌をうたい、また黙祷して兵士に……。先生はニュースね、戦争のことを……。

磯田：その時どういう風に思いましたか。

沙：あの時、わたしは小さいですからね、日本の学校に行ったのではじめから一生懸命に勉強していました。その後ね戦争が始まったので、中国人は（で？）日本人の学校に入ったのでとてもね注意していました。話す場合でも何か言われないうか。勤労奉仕のとき先生がいないので [時には]、ゆっくり働いていました。先生がいたらね一生懸命に働いていますよ。その時日本人の学生は先生に言ったんです。先生がしたらね、サンリク？　はないね、怒ったら立ってなさい、こう言ったんです。

駒込：戦争が終わった時日本は、中国と戦争したわけですね、日本が負けたほうがいいと思っていましたか。

沙：学校でね、先生は毎朝日本軍は必ず勝ちますっていったんですね。8月15日のときラジオを聞いたので、先生たちは、学生たちは全部泣いたんです。涙を流した。私もあのとき何かわかりませんよ。だから涙を流したんです。お家へ帰ってから（聞き？）ました。戦争が（済んだ？）と。

駒込：韓さんは日本が負けたほうがいいと思いましたか。

◎：その時ですね、生徒たちは、生徒の連絡があるんだと？、一日も早く負けたほうが良いと思ってました。中国人ですね、日本の奴隷になりたくないんです。だから仕事のときですね、ある人はどういう病気があって、あるとき……がよくないとって、消極的にストライキ。

磯田：韓さんは8月15日にはどうでしたか。負けたということを学校で聞いたときには。

◎：（意味不明の短いやり取り後）そして家に帰りました。

野村：家の人はどうでした。8月15日には。

沙：楽しいですよ。わかりましたからね。楽しいです。

——中略——

沙：三従、四徳。……中学校の家事はね、家事の意味はね、三従四徳の精神で。

駒込：その内容はということですか。

沙：三従はね、あのお父さん、主人、息子。……あの時ね、学校でね、婦人はね、カイシャ？ にイジ（家？）はない。……は家がある。ご飯作り……。だから小学校のときに、学生は小さいときに三従四徳を習う。

駒込：父と、主人と子どもに対して従えと。

沙：四徳は、……。

◎：四つはちょっと難しいですね。忠、孝、仁、義。（しばらく文字のこと？ を論議）

駒込：その三従四徳は学校で教えられるのではなくて、家庭でお父さんとかお母さんからこう言う風にしなさいといわれますか。……家の中でもお父さんやお母さんから三従四徳が大事だとよくいわれますか。

沙：いわれますよ。この精神はね、中国の歴史の孔子・孟子、から来たのね。……多分小さいときの学校の家事の授業だったと思います。

◎：日本はですね、中国の儒家の文化を導入して、それからこれをもって中国の占領地で教えています。なぜならこれを教えて日本の話を聞かせるわけです。

駒込：儒教の文化を日本に都合のいい部分だけ抜き出してきて、学校でも教えると。

◎：そうです。

磯田：学校で楽しかったこと、一番楽しかったことってありましたか。あったらどんなことですか。

◎：(韓さんの答え) 一番楽しいことですね、解放されたこと。日本人に
いじめられることがなくなりましたからね。 —以下省略—

(記録・磯田一雄)

④ 黒龍江省社会科学院における聞取り (特徴的な発言) 1991年8月14日

①高云山氏 (副研究員・1945年建国大学在学中)

- ・建大にかんする歴史的事実、教育内容については日本人の研究がすす
んでいる。
- ・それはそれとして労苦をともにした仲間としての友情は現在もかわら
ず続いている。
- ・最近、日本の同窓会が『欲喜嶺はるか』という本をだした。私も寄稿
したので読んでほしい。

②孟宪章氏 (副研究員・1945年阿城国民高等学校在学中)

- ・勉強したくて入学したのだが「建国精神」などの科目は興味がなく、
数学や物理、化学などに熱心な学生が多かった。日本人教員の教える
内容はやさしい簡単なものだったので書店で日本語の本をさがして勉
強した。
- ・赤い小さな本で建国精神の解釈をするだけの校長先生、殴る蹴るの軍
事教官、日・朝・中の順位をつけた民族差別の「民族協和」、これに
たいする中国人学生の不満はとても強かった。
- ・日本の敗戦の日、学生は上着を脱いで空に放りあげ、校舎をブチ壊し
てまわった。いま思えばバカげたことだが日本語辞書を破りすてたり
した。
- ・「建国精神」には疑問をもったが、日本人がうごかしている学校だと
おもっていたから聞き流していた。

③劉民声氏 (副院長・1945年克山国民高等学校3年生)

- ・いろいろな科目を勉強するはずだったのに、後半は協和教育、軍事教
練、勤労奉仕などに時間をとられ、地理と歴史各科はうすっぺらな一
冊になり、農業高校なのに教科書は「作物」という薄い本だけになっ
た。それも授業時間不足で知識は僅かな程度だった。
- ・年少の頃はまじめに勉強したが、大きくなるにつれて植民地支配に疑
問をもちはじめた成績も下がった。中国人だと名乗ることが許されず

中国人は程度が低いといわれ、日本を友邦、親邦などと言わされることに学生たちは不満もっていた。

- 学校には100haの農地がわりあてられていたが、ある日、近くの日本人農民が羊をつれてはいりこみ草を食わせたので皆で追い払った。そのときひとりの学生はその日本人を殴ってしまった。心配なのでそのことを学校の先生に報告したら「心配するな」と許してくれたのに、夜になると日本の憲兵がきてひとりひとり学生を取り調べ、幾人もの学生を逮捕し連れ去った。学生たちがどうなったかは、今日まで全くわからない。

④ 武尚文氏（副研究員・1945年肇東師道学校2年生）

- 師道学校は全寮制度で学費・食費・制服は官給で卒業後は教職義務があった。
- 教師養成だから、精神教育は内容も方法もたいへんな厳しさだった。先生にはもちろん上級生にも軍隊式の敬礼をさせられ、毎日、皇居・帝宮の遥拝、「国民訓」暗唱、そのほか食事前には祈りの言葉があった。頭は全員頭髪を剃らねばならず、校内では日本語で話さなければいけなかった。中国語を話したため卒業の四カ月前に退学させられた学生もあった。食事も悪く勤労奉仕は辛かったが、生活と職業のために我慢した。

⑤ 唐文斌（元副研究員・牡丹江工科国民高等学校卒）

- 1944年に国民高等学校を卒業した。教科書は全部日本製であり学校全体が「大東亜共栄圏」のための厳しい教育だった。王道楽土や天皇のことを毎日教えられた。その反面、私は中国の歴史が全くわからなかった。私は汽車通学だったが、寮の食事は日本人と朝鮮人は米、中国人は橡子と差別され、かなりの学生は学校をやめた。
- 日本人教師はいい人そうでない人があったが、中国人教師や朝鮮人教師は日本人以上にわれわれをいじめた。
- 思想犯として逮捕された中国人教師があった。その先生は麻袋にいれられ袋の口を括られて荷物のように連れ去られた。翌日殺されたらしいときいている。
- 日本人は思想犯をたいへん恐れていた。抗日連軍のひとりが見つかり日本人に銃殺されたのをみたこともあるし、私の母の弟の息子（従兄）は抗日連軍ではないのに逮捕された。9.18以後、日本機に爆撃さ

れ70人くらいの農民が死んだ。母と子の遺体の様子をおぼえている。

(記録・野村 章)

⑤ 内蒙古自治区滿洲里市における聞取り（特徴的な発言） 1991年8月16日

①丹 森氏（蒙族・1945年ウランホトの王爺廟興安学院3年生）

- 国民学校・国民優級学校・興安学院と約7年間奴化教育をうけた。興安学院は全員がモンゴル族の学生で、毎期約50人、私は第10期だった。学費・寮生活費・服装はすべて無料で、貧しい学生の家庭には蒙民厚生会から補助金がでた。寮の食事はトウモロコシの挽き割りとう馬鈴薯を一年中食わせられ、腹をこわす学生が多かった。
- 教育内容は①モンゴル人の人材養成だというのが、実は軍国主義人材教育②すべて日本天皇陛下に忠誠を尽くすという思想教育③絶対に日本のすべての観念に服従し言論の自由をなくす同化教育の三方面だった。
- 学科は日本語が最重要で、数学・化学・物理・地理・歴史・満語のほか軍事教練があった。軍事教練では全く奴隷扱いで体罰も横行していた。柔道のネガシラという教員はいつもピストルをもっており、理由もなく学生をなぐったりしていた。彼は日本の特務だということだ。
- 校長は思想問題について厳しかった。2年生のとき、4年生が二人、思想犯で逮捕されたが、その行方はわからない。学校が厳しくなるほど反満抗日思想はたかまり、表面にはでなくても、ウラではいろいろ話し合っていた。上級生からは熱河方面から伝わった八路軍やソ連のことを聞いた。だから学校は学生の中に特務分子をつくり、何時の間にか学生がいなくなるというできごとがしばしばあった。
- 1943年前後だったと思うがジンギスカン廟建設の勤労奉仕があった。ジンギスカンのような偉い人になれ、という宣伝は学生たちには喜ばれた。しかし、あのままもし続いていたなら、反満抗日運動の別の高まりが起きたと思う。

②高新友氏（蒙族・1945年チチハル師道学校特別養成所卒）

- 19歳のとき蒙民厚生会が経営する小学校の教員になった。蒙民厚生会は、1938年にできた民間機関で、はじめは32の県旗から、300万円をあつめ、のちには政府の興安局から予算をださせ、生産施設や日本留

学，初等教育などを運営していた。

- 当時は日本語が最重要科目で，私も日本語のできがい生徒には眼をかけた。蒙族語は週に1回しかなく，教師間は日本語で話さなければならなかった。
- このような奴化教育に加えて同化政策があった。蒙族にたいして50年後には日本籍にはいる予定だといい，漢族は150年後くらいになるだろうといていた。第2次大戦後，侵略は必ず失敗することがはっきりした。

③斯 琴氏（蒙族・1945年札蘭屯女子国民高等学校1年生）

- 日本征服下の女子国高に在学していたが，学生生活はひどかった。食料の配給は毎月僅かで，中国人は米を食べることが許されなかった。入学して通学のカバンをつくる布地を買おうとしても木綿の布は全くなかった。
- 毎日の朝礼では「国民訓」の暗唱や天皇，皇帝の遥拝，授業のはじまりや食事の前にはなにかのお祈りをさせられ，毎日のように「日本を中心としてアメリカに反対し，大東亜共栄圏を建設するのだ」ということばかり教えられた。
- 日本人の先生は，日本語とモンゴル語の共通点からみても，両民族の祖先はひとつだと聞かされた。それでジンギスカンを尊敬せよと教えられた。
- しかし授業では，日本語は1，2時限，満語は3，4時限にあり，蒙族語は午後にしかなかった。
- 優級学校の頃，私をふくむ12名の生徒が，日本語作文の優秀作にえらばれ，長春の放送局から朗読を放送したことがあった。最優秀の子どもは日本の学校に入学できるということだった。
- 侵略時期，私たちはただ真面目に一生懸命日本語を勉強していたが，だんだん，日本語さえよければ，あとの科目は成績が悪くてもよい生徒とされることには疑問を感じるようになった。いまは，侵略というものとは絶対に失敗するものだ，ということに身にしみて考えている。

（記録・野村 章）